

言語学者の考えた国際補助語 イエスペルセンとノビアル

研究ノート

甲斐崎 由典

早稲田大学大学院文学研究科
独文専攻Angelus Novus会（編）
『Angelus Novus』第26号
65～78頁

1998年9月30日発行

（この抜き刷りの頁割りは実際に
出版されたものと異なります）

[研究ノート]

言語学者の考えた国際補助語
イエスペルセンとノビアル

甲斐崎 由典

「最近エスペラントの發展ぶりは目覺しいものがあり、多くの秀でた獨習書は次ぎ次ぎと公にせられ、都市に於ては最早、エスペラントの何物なるかを辨^{わきま}へぬ人は數ふるばかりとなり、今やエスペラントは大衆常識の一たらんとしてゐる有様である。」

これは今から 65 年前のエスペラント入門書の序文から引用したものである。今、すなわち 1998 年現在、この序文が記された当時から見れば、日本の国際化はよっぽど進んだと言えるだろうが、その国際間の意志疎通において活躍しているのは、残念ながらエスペラントではなくて依然英語であり、現状を上を倣って言えば「都市に於てもエスペラントの何物なるかを辨へる人は數ふるばかり」となってしまった。

しかしながら、公式の場で使われることはほとんどないとはいえ、「民際語」エスペラントは少なく見積っても相変わらず地球上で数万人によって書かれ、話されており、国際補助語として 100 年以上に亘って所記の目的を果たしてきたことは充分評価できるものである。

ポーランドの眼科医ザメンホフが長年の推敲の上このエスペラントを発表したのは、前世紀末の 1887 年であるが、この時期には先行のボラピュクに触発されて他にも多数の人工語が発表された。ただし、ボラピュクが正に人工語と呼ぶに相應しい、一見訳のわ

からない奇妙な言語であったのに対し、エスペラントは多くの語彙をボラピュクほど変形させずに採用して、実用上は結局その方が受け入れられ易いことを明らかにしたので、エスペラント以降の人工語は極端に言ってしまうれば似たり寄つたのものとなった。

意外なことに、ボラピュクやエスペラント、そしてそれ以降発表された数多くの人工語に関して、言語学者は参考意見を提出することはあっても、設計者として登場することはほとんどない。専門分野にもよるが、言語学者こそ様々な言語に通じ、体系的に整理された詳しい知識を有するはずであるから、特定の言語集団を対象とする共通補助語の設計には最適な人材と言えそうなものだが。まあ実際には、言語学者は既存の自然言語を扱うだけで充分忙しく、また興味を引くような例外現象のない、完全に計画された通りの規則性を持った言語など却って研究対象としては面白くない、ということであまり手を出さないのであろうか。

このような流れの中で、デンマークが世界に誇る英語学者・音声学学者イエスペルセンは異色の存在である。イエスペルセンは当初から国際補助語の問題に関心を持ち、次第に積極的に関わることになり、よくエスペランチストがエスペラント史上最大の危機と呼ぶ新人工語イド発表とそれに続くエスペラント改良運動の一連の流れの中では、そのイドの共同設計者として名を連ねている。さらにその後も独自に国際補助語の研究を進め、ついには 1928 年にノビアルという人工語を発表するに至る。

ノビアルは、長年に亘って英語を中心にゲルマン語全般を深く研究してきたイエスペルセンが、ボラピュクから始まってエスペラント、インテルリングア、イド、ラティーノ・シネ・フレクシオーネ(非変化ラテン語)、オクシデンタルなどの様々な人工語も同じように厳しく見極めた上で、自らの研究成果の集大成として発表したものであり、その意味では言語学者イエスペルセンの業績のひとつの頂点を成すものと言えるのではないだろうか。自叙伝の中の当時を振り返る件にも、一連の人工語設計者の中では自分が最も音声学を詳しく研究した者だ、という記述が見られ、「プ

口」としての自負が窺える。その意味で、ノビアルはプロの言語学者が長年の成果を元に設計した当時最高の人工語であり、着想はともかくいわば素人考えのエスペラントなどを凌駕するのは時間の問題と、イエスペルセン自身は考えていたとしても不思議はない。

ところが実際にはいくら待ってもそうはならなかった。元来エスペラントの不備を補う意味で提出された様々な人工語は、このノビアルも含めて今ではいずれもすっかり忘れ去られてしまい、逆にその攻撃目標であったエスペラントの方は勢力を増したとは言えないかも知れないが、相変わらず遅く生き続けている。

後から散々改良案を積み上げたのに、動きだしたら結局最初案が定着してしまった、ということは日常の他の場面でも多々あることだが、今世紀初頭の様々な人工語発表の中で、結局は最初（前述したとおりボラピュクは別系統とする）のエスペラントが国際補助語として残ったのも同じ経験則による、と簡単に片付けてしまえるものなのだろうか。偉大な言語学者イエスペルセンもそのような経験則の前には非力であった、というだけの話なのだろうか。

一般に日本のエスペランチストは、ザメンホフが決めた文法原則を、そうあるべきものとして素直に受け入れることが多いようだが、ゲルマン語を中心に統語論を研究してきた駆け出しの研究者として、筆者は以前からエスペラント文法の一部に不満を感じていた。そのくせ、不勉強が祟って、最近イエスペルセンの自叙伝を読むまで、イエスペルセンが国際補助語に相当な業績を残したことを全然知らなかった。そしてイエスペルセンが最後にはノビアルという人工語まで自ら発表したことを知ったのだが、それが現在では完全に、と言っていいほど忘れ去られていることが今度はどうにも腑に落ちなかった。

随分長い前置きになったが、以上が筆者が今回敢えて、何を今更という批判も省みず、イエスペルセンのノビアルについて少し

詳しく調べてみようと思いついた^{いきさつ}経緯である。著名な言語学者が綿密に設計して組み立てたはずの人工語は、何がもとで「素人」のエスペラントにあっさり敗れたか。前述した経験則も考えられようが、何か他の、すなわちノビアル自体にその原因はないか、今更 100 年近い前の歴史を変えようもないわけだが、ここで考えてみることにしよう。

イエスペルセンは、最初ノビアルを 1928 年に発表した^が、その後各方面からの批判意見や自身の再検討の成果を採り入れ、1934 年に改訂したノビアルを発表している。両者の違いは大したものではないが、特に挙げるとすれば、改訂されたノビアルでは正書法が少し柔軟性を持ったものに改められたことである。本質的な部分は全くと言っていいほど変わっていないので、今回はこの両者は特に区別せず考察を進めていくことにしたい。敢えて区別が必要な場合は、1928 年の最初のノビアルを「旧ノビアル」、1934 年の改訂されたものを「新ノビアル」と表記する。

欧米で出版されたエスペラント以降の人工語を扱った文献、特にいくつかの人工語を同時に扱った対照研究は、ほとんどが語彙・派生法を詳しく分析している。これは筆者の考えでは、欧米（ここでは「印欧語を母語とする」という意味合いで考えていただきたい）の利用者にとっては、一連の人工語はある意味で自分の母語の簡略版であり、文法事項で未知の事柄はまずなく、一番問題となるのは語彙の構成であることが原因だと思われる。熟語表現などをはじめとする、統語的に特殊な場面で生じてくる意味特性の存在が排除されているとすれば、後はいかに多くの語彙を知っているか、理解できるかがその人工語に通じている度合いの尺度となるのである。Jakob(1943)も、ノビアルの最大の特徴は、エスペラントのような品詞別強制母音語尾を廃止してより自由度

の高い派生法を生み出したことであると言い切っているが、この評価の良否は別として、語彙・派生法の問題についてはこれらの先行研究を参照していただくことにして、今回ここでは特に触れないことにする。実際問題として、印欧語が母語ではない利用者にとっては、むしろ語彙・派生法に対する関心度は相対的に低くなるのではあるまいか。

以降の各項目で時々触れると思うが、ザメンホフのエスペラント発表とは異なり、イエスペルセンは言語学者らしく、ノビアルの各文法事項に、どのような根拠を踏まえてこのように決めた、ということが一々付記してある。その論述には、ノビアルという人工語の仕様書ということを離れても、言語学的にイエスペルセンの深い観察眼が現れていて大変興味深いものがある。

またもや前置きが長くなってしまったが、さっそくノビアルの個々の文法事項を、設計者も念頭に置いたであろうエスペラントと比較して差を浮き彫りにしながら見ていこう。

対立音素の減少

エスペラントで区別されているものの内、c と ç、ĝ と ĵ、s と z の区別が廃止された。ザメンホフのように子音の多いポーランド語などのスラブ語を母語とする人間には当然の区別であろうが、特に ĝ と ĵ の区別などは印欧語人（以降も「～語を母語とする人」を「～人」と表記する）でも苦労する人が多いはずである。筆者もろくすっぽ発音記号を理解していない高校生の頃、初めてエスペラントに触れて、どうにもこのふたつの音の区別が理解できなくて投げ出した覚えがある。一方でノビアルでは s と z の区別が廃止されている。統計学的な根拠に基づく訳ではないが、こちらの方の区別は多くの言語で一般的なもので、却って日本人としても奇妙な気がする（韓国人は歓迎するかも知れない）。ここで思い当たるのは、系統に関わらず冠詞を後置するバルカニズムではないが、北欧ではフィンランド語も含めてザ行音がないことである。優秀な音声学でもあったイエスペルセンといえども、音素の選

択には母語の影響、あるいは母語彙員になってしまうのは面白い。因みに、自伝に依れば、「音素」という概念はイエスペルセンがノビアルの構想を練っている頃に言語学に定着し始めたそうである。

エスペラント式「特殊」文字の廃止

対立音素を減らしたことにより、当初から不評だった印刷所泣かせのエスペラントの ĉ, ĝ, ĥ, ĵ, ŝ, ŭ が廃止された。現在でもこれらの文字は曲者で、ホームページや電子メールでは x をいわば音楽で言う臨時記号のように使い、例えば ĉ は cx と表記するなど苦労している。ただし、正書法が少し柔軟になった新ノビアルでは、ç の文字も許容されるようになった（ただし推奨するものではない）。

対格の廃止と属格の導入

デンマーク語や英語も人称代名詞を除けば対格は語形には現れない。確かにエスペラントに対格語尾が強制なのは昔からとやかく言われてきた点であるが、逆にエスペラントでは分析的に表現する属格を新たに導入した（ただし分析的に表現してもかまわない）のは、これまた母語の影響か。

不定冠詞の導入

エスペラントと同じく定冠詞はあるが、日本人には困ったことにさらに不定冠詞も導入された。ポーランド語とエスペラントには不定冠詞がなく、デンマーク語とノビアルにはあるのは、偶然の一致とは思えない。この不定冠詞の導入については、筆者は今のところイエスペルセンが根拠を述べている箇所が見付けられない。日本人として筆者は特に気になるところなのだ。

品詞別強制母音語尾の廃止

「品詞別強制母音語尾」とは随分長い語（筆者による）であるが、つまりエスペラントでは名詞は o で終わり、形容詞は a で終

わる、などという例の規則を言い表したものである。自伝でも primadonna (プリマドンナ = 名詞!)などを例に挙げて述べているが、既存の語を積極的に取り込むためにも、ノビアルでは品詞別強制母音語尾を止めた。前述したとおり、語彙・派生法に関して詳しくは先行研究を参照していただきたいが、ノビアルでは自然性を表したり、一部の動詞派生名詞の意味特性を特徴づける時に利用される。他には先のプリマドンナでもそうであるが、(他の自然言語での)既存の語がもともと母音で終わっていれば、その母音をなるべくそのままノビアルの語形でも残すために使われる。逆に言えばノビアルでは語がどんな母音、さらにはどんな子音で終わっていようが、一意的にその語の品詞は確定できないのである。これはノビアルの、エスペラントと比べて全く新しい特色である。

この革新点の根拠として、イエスペルセンは、既に述べた柔軟な既存語の取り込みに有利になるという他に、力点のない語尾が機能的に重要となると、英語人やロシア人(筆者は、イエスペルセンとしては本当はここにデンマーク人も挙げたかと思う)には使い難いものになってしまうであろうこと、また動詞の不定形も従って様々な母音語尾を持つわけだが、英語や中国語を見れば不定形の母音を揃える必要がないことはわかる、と述べている。この最後の、取って付けたような大言語・中国語への言及を含む不定形の母音に関しては今ひとつ議論が乱暴な気がするが、それ以外の論拠は確かに説得力はあると思う。しかしながら、設計者の当時の意図はいざ知らず、現在のように非印欧語人も念頭に置いた上で国際補助語というもの考えてみると、この品詞別強制母音語尾廃止は、エスペラントから良くなった点というよりは、ノビアルのひとつの重大な欠点として見えてくるように思う。

イエスペルセンがエスペラントよりも対立音素を減らし、またエスペラント「特殊」文字も撤廃して、その上で非常に単純明快な正書法を編み出した根拠を詳しく読んでみると、優れた言語学者らしい、含蓄に富んだ主張に行き当たる。要約すると次のよう

になる。「人工語というのは、通常は母語を身に付けた後に習得するものであり、発音と綴りの関係も、まず発音を覚えてからどう綴るかを学ぶ母語の場合と逆で、独習のためにも綴りを見てどう発音するかが容易にわかることが重要であり、従って正書法もそのことを踏まえたものでなくてはならない。」これは全くもって正しい考え方だと思う。ところで、この考え方を先の品詞別強制母音語尾の問題に適用するとどうであろうか。ここで念頭に置くのは、文法は母語の簡略版と言え、語彙さえ押さえればだいたい理解できるという印欧語人ではなく、文法も語彙も母語と大した共通点はないが、既存のどの自然言語よりも文法が単純なので使ってみようという非印欧語人である。そうすると結果は明白である。母語とは違って、絶えず文法規則と辞書を参照しながら理屈を頼りに文を理解しようとする場合、すなわち簡単に言ってしまう構文解析をする場合、語の意味を調べる前に語の統語情報がわかると俄然有利である。構文解析で思い出したが、機械翻訳で難しい英文の例として、よく「Time flies like an arrow.」というのが挙げられる（「解析失敗例として『時蠅は矢を好む』となる」）が、日本人でも英語を読んでいてどれが名詞でどれが動詞でどれが形容詞かわからなくなった経験は必ずあるはずである。その点、ドイツ語は普通名詞と固有名詞の区別が曖昧になるきらいはあるがどれが名詞かで間違えることはないわけだが、それはともかく、先に述べた、ノビアルの重要な欠点とはまとめると次のようになる。すなわち、多分もっぱら印欧語人しか念頭に置いていなかったイエスペルセンとしては、やはり文法よりも語彙、すなわち構文の明解さよりも語彙の豊富さを選んだわけであるが、非印欧語人の場合は、語彙はいずれにせよ母語とほとんど結びつきがないので初めから覚えなければならず、そうなるのとどちらかと言えば構文がわかり易くなっている方が歓迎できる、ということである。

動詞派生分詞の単純化

ザメンホフの母語のポーランド語を始め、ロシア語やチェコ語

をはじめとするスラブ語では、動詞から派生する（被動）形動詞や副動詞は、元の動詞の相（アスペクト）の違いによって様々な相対時差的意味合いを表現できるが、こうした動詞派生分詞の区別の細かさはエスペラントにも持ち込まれた（日頃使っている者には便利この上ないものであろう）。そしてエスペラント発表以来、動詞派生分詞については絶えず論争が繰り広げられ、1960年代には全世界のエスペランチストを二分するほどの議論（いわゆる「ita派と ata 派の論争」）が行われたこともあるが、イエスペルセンはこの点に関してはあっさりゲルマン語人らしく、ノビアルでは動詞から派生する分詞は現在分詞と過去分詞のみ、とした。ちなみにイエスペルセンはノビアルに関しては動詞の相について述べていない（と思われる）。

間接話法での時制の一致の導入

筆者は、これは前項で述べた動詞派生分詞の単純化により、何か他に相対時間差を表す精密さが欲しくなったからではないかと推測しているが、日本の学校英文法でいういわゆる時制の一致である。イエスペルセン自身は、時制の一致というのは本来必要なものだと断じており（デンマーク語や英語では必ず一致させる）なぜエスペラントやイドでは導入されなかったかという、「過去から見た未来」時制を表すために新たに活用形を組み込むのを良しとしなかったからであろう、と述べている。次項で触れるが、ノビアルは基本的には時制は分析的に表示するので、その点はあまり根本的な問題とならないのである。

動詞の定形の分析的表示の徹底化

エスペラントでは活用語尾によって示す動詞の時制、法といったものは、ノビアルでは分析的に表示するように改められた。すなわち、動詞自体は不変となり、例えば過去形であれば前に did、未来形であれば sal、受動形は bli、不定形は tu を付けて表す。ここに挙げた例を見てわかる通り、そうした動詞補足の機能語はほ

とんどゲルマン語起源のものである。また、イエスペルセンはこの分析的な方法の利点として、例えば動詞と補足機能語の間に副詞を入れたりすることができる、と言っているが、これが果たして利点かどうかは詳しく検討すべきことだと思う。日本人が印欧語に取り組むと、否定語や副詞の位置などで案外苦勞することを思い起こしてほしい。

動作受動の完了形と状態受動について

これはゲルマン語ではおなじみのものである。また、この両者の区別は、エスペラントでも例の動詞派生分詞を使い分けることによって表現できる（これについては Manders が詳しい）ので、ノビアルの新機軸ではないが、表現形式が一層ゲルマン語らしくなったということで触れておいた。

さて、少し詳しくノビアルの特徴を見たところで、プロの作ったノビアルがなぜ素人のエスペラントを越えられなかったか考えてみたい。

まず、ノビアルの言語的特徴であるが、設計者がゲルマン語人であり、かつゲルマン語の専門化であることも影響してか、何ともゲルマン語的である。もちろん、a、e、i、o、u以外の母音は一切排除してあるので、エスペラントと同じく書かれたものを一見すると母音の多いロマンス語のように見えなくもないが、品詞別強制母音語尾の廃止の項でも述べたように、語末音は母音でも子音でもよいので、よく見ると子音、しかも有声子音で終わる語も多い。それ以外にも、属格や不定冠詞の導入や動詞の定形の分析的表現、さらにはそこで使われる補足機能語の語形自体（この辺は「英語化」と言ってもよいだろう）動詞派生分詞や動作受動の完了形と状態受動の表現形式、間接話法での時制の一致など、結

局ここでノビアルの主な特徴として取り上げた点はほとんどがゲルマン語的要素である(筆者が意図的に取捨選択したのではない)。

そうなると、発表当時に遡って印欧語人だけを念頭に置いても、あるいは現代を視野に入れて印欧語人と非印欧語人のどちらを念頭に置いても、ふたつの点で既に普及しているエスペラントにかなわない点があると思う。

まず一点は発音である。確かに品詞別強制母音語尾を廃止した分、英語やロシア語のように力点のない音節にあまり注意を払う必要がなくなったとはいえ、代わりにエスペラントと比べて特に語末で母音の響きが減って子音、しかも有声子音が響くようになった、すなわち、いささか主観的な基準だと思うが敢えて使うと、言語音として響きの美しさが減ったと思われる。もちろんエスペラントでは逆に語頭の方に、イエスペルセンがはっきり排除したようなスラブ語的子音連続があるが、筆者は相対的にはノビアルよりエスペラントの方が響きは美しいと思う。ノビアルが発表された当時、つまり人工語発表の盛んな頃は、現在よりも実際に会話を行ってみる試みも多かったに違いない。そうだとすると、このエスペラントとノビアルの響きの違いというのは当時の利用者にはかなりはっきりと認識されていた可能性がある。

またエスペラントに比べて見劣りするもう一点は、明白なゲルマン語らしさである。もっと言ってしまえば英語らしさである。印欧語人でも、非印欧語人でも、現在事実上国際語である英語は取り敢えず置いておいて、エスペラントなどの国際補助語に手を出すということは、換言すれば、積極的な意味でも消極的な意味でも英語を使いたくない時であろう。あるいは、「英語」などという特定の言語で考えたくなければ、こうも言えよう、すなわち、ある(自分を含まない)集団が母語とする言語で不公平な意志疎通のやり取りをしたくない時であろう。そういう場面で、いくら言語学者が長年の研究成果を総動員して設計したとはいえ、特定の既存の個別言語との共通点が目に付くような人工語を提供されても、それに喜んで飛び付く、ということにはならないのではな

いだろうか。エスペラントは、よく語彙や語形だけを見てロマンス語に似ていると即断されることが多いようだが、ノビアルに比べれば印欧語内ではよっぽど中立だと思う。

以上とは別に、印欧語人だけを念頭に置いていれば問題とはならなかったかも知れないノビアルの弱点としては、既に挙げたように、エスペラントに比べて構文解析が難しくなっている点である。これについては品詞別強制母音語尾の廃止の項で詳しく述べたのでここでは繰り返さない。

以上、ノビアルがエスペラントに負けた原因として、言語的特徴から言語音の違い、英語らしさ、構文解析の難しさ、の3点を挙げたが、それ以外にいくつか外的な要因を挙げておきたい。ただしこれらに関しては、筆者は当時の社会情勢などを調べたわけではないので、あくまで憶測に過ぎないことに注意されたい。

まず、エスペラントとノビアルでは一般に対する「インパクト」が随分違ったと思う。国際補助語として人工語を作り出すという発想は良かったものの、難しすぎて訳のわからない印象を与えたボラピュクの後で、相当簡略化した文法規則と既存言語から語彙をそのまま採るといって斬新さで登場したエスペラントと、エスペラントももう30年近く普及して、他にも散々類似の人工語が発表された中に混じってのノビアルである。また、エスペラント派分裂の元凶であるイドの共同設計者であるイエスペルセンが作った人工語か、という思惑もあったかも知れない。

エスペラントは、現在まで何度か改訂の動きは出たにせよ、そうした動きには毎度（エスペランチスト達が）頑なに抵抗し、発表から100年以上たった今でも依然としてザメンホフが取り決めた文法規則は変更されていない。エスペランチストの多くは、この頑固さが、改良に改良を重ねて結局消え去った、他の多くの人工語とエスペラントの命運を分けたものとして評価しているが、筆者はこの考え方は正しいと思う。国際補助語としての人工語には単純、明解さが要求されることは誰も認めるところであろうが、ある意味で、その改訂というのはこの理念に反するのである。

自然言語の、様々な例外・複雑さが使用者の脳に対する負担を増すという意味で良くなければ、人工語の「改訂」もまた、それまでの利用者に新たな記憶の負担を強いるという意味で良くないことであろう。もっと別な言い方をすれば、愛着が湧かなくなってくるのである。人工の言語に愛着とは奇妙な印象を与えるかも知れないが、却って人工だからこそ、自ら積極的にならなければ必要のないものだからこそ、ある種の愛着は必要だと筆者は考える。いくら改訂後に良いものができるとしても、あまり頻繁に変えられたのでは、次第に利用者は負担を感じ、つまり面倒になってきて、その内その人工語を見捨ててしまうことにもなりかねない。

最後にもう一点挙げるとすれば、これはイエスペルセンも自伝の中で述懐しているが、設計者当人も実際他の仕事で忙しくなったりで、一貫して熱心に新人工語の普及に努めなかったことである。イエスペルセンによれば、ノビアルの語彙を英独仏対照で網羅した辞書（Jespersen（1930））は、自著の中で最も売れなかった本のひとつだそうだ。本稿では折に触れて、素人のエスペラントとプロのノビアル、という言い方をしたが、この点に関しては逆にプロであることが災いしたかも知れない、と筆者は考える。ザメンホフの生涯についてはあまりに多くのことが書かれてきたのでここでは繰り返さないが、設計者が幼い頃から身近に体験してきた様々な苦勞からエスペラントは生み出され、そしてそのザメンホフの考えに感動を覚えた多くの人々と共に、ザメンホフは熱心にエスペラントの普及に努めた一方、ノビアルは優れた言語学者が長年の英知を結集して作り上げたものであり、もちろん人類のためになるように、という国際補助語の基本理念はイエスペルセンの念頭にもあったであろうが、その態度は一貫して冷静なものである。国際補助語のような、生存に絶対不可欠ではないものが、言語学者ばかりを含むわけではない（むしろ絶対少数であろう）人々の間に広まって行くには、その人工語の出来も大事ではあるが、冷静な論理よりも、共感を呼び覚ますような情熱の方が重要だということであろうか。

以上を総括すると、ノビアルがエスペラントを越えられなかったのは、言語学者の理想と、(言語学には疎い集団としての)一般大衆の期待が一致しなかったということになるだろうか。筆者としては、こんな単純にイエスペルセンの業績を片付けてしまうのは畏れ多い気もするが。しかし実際のところ、既にノビアルよりはエスペラントに長く触れてきた筆者が客観的な判断を下すことは難しいが、非印欧語人ではない日本人として新たにどちらかを国際補助語として選べと言われたら、エスペラントを採ると思う。単純化された人工語とはいえ、同じような難易度の言語を新たに勉強するなら、もう知っている英語に似た言語は敢えて選ばないだろう。

(付記)

イエスペルセンは1943年、ドイツ占領下のデンマークで死去した。人類のためを思って長く国際補助語問題に関わってきた言語学者としては、無念の死であっただろう。

参考文献

- Jespersen, Otto (1921) *Artificial language after the world-war*.
En: *Jespersen (1962)*, p. 755-763.
—— (1928) *An international language*. London.
—— (1930) *Novial lexike*. London.
—— (1931) *Interlinguistics*. En: *Jespersen (1962)*, p. 771-782.
—— (1933) *Nature and art in language*. En: *Jespersen (1962)*,
p. 705-724.
—— (1938) *En sprogmands levned*. København.
—— (1962) *Selected writings of Otto Jespersen*. Tokyo.

- Jakob, Henry (1943) *Otto Jespersen. His work for an international auxiliary language*. London.
- (1947) *A planned auxiliary language*. London.
- Koutny, Ilona/Kovács, Márta (red.) (1997) *Struktura kaj socilingvistika esploro de Esperanto*. Budapest.
- Manders, W. J. A. (1947?) *Vijf kunsttalen. Vergelijkend onderzoek naar de het waarde van het Volapük, Esperanto, Ido, Occidental en Novial*. Purmerend.
- 小野田幸雄 (1933) 『エスペラント四週間』、東京・大学書林。
- フランソワ・ロ・ジャコモ (1992) 『言語の発展 国際語エスペラントの観点から』、水野義明訳、東京・大村書店。
- ピエール・ビュルネー (1964) 『国際語概説』 (= 文庫クセジュ 359) 和田祐一訳、東京・白水社。
- 三宅史平 (1976) 『エスペラントの話』、東京・大学書林。